

イラン・クニヤバスの旅

夫節藤 近 班部旋あ旅行

テヘラン・バボールの旅

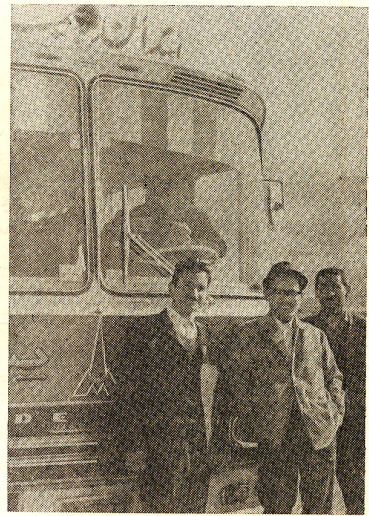
四十二年暮、私は底冷えのするテヘランからエブルブルズ山脈の反対側の町バボールへ向うバスに乗っていた。

テヘランは、福島市と同じ緯度に位置する上に、高地にある為、冬の寒さは身を切るような厳しさだ。年間を通して雨量が少ないので、市内には雪は見られない。加えて、緑がまったく目に入らないし、土色の壁造りの家並が街全体をうす暗い感じにしている。なんとなくうらさびしい雰囲気のだよう首都である。それでも、世界有数の産油国は、新しい都市づくりをあらゆる面で少しずつ見せ始めた。一応メイン・ストリートには欧米資本のビルが、ところどころに建ちはじめた。ガソリンの供給過剰から車代の安いのは大いに助かる。

私がバボールへ行こうと思いついたのは、これという目的があった訳ではないのだが、イランの最高峯ダマバンド（五、六七一M）をじっくり見てみたかったのと、出来ればカスピ海をのぞいてみたいと僅か三日間のイラン滞在を大いに欲ばってテヘランとバボールを線で結んでみたのだ。ところがテヘランへ着いたその朝、航空会社のミスで荷物だけバイルートへ持っていかれ、送り返されてくるのを待ったため一日テヘランで足止めを食い、バボール往復には二日の余裕がなくなってしまった。

そこでまずテヘラン駅へ行ったのだがその日、

バボール行の列車は出なかった。直ぐタクシーでバスターミナルへ行き、辛うじて発車寸前のバスを捉えることができた。十一時にテヘランを発ったバスは市内を通り抜け、途中で二度三度客を拾いながら郊外へ出た。座席定員四十二人のバスはほぼ満員であった。荷物は屋根の上にのせる。バボールまで六時間の予定で七〇リアル（約三三五円）。出発して一時間もたたない内に、早くもエブルブルズの前衛の山に入りこんできた。首都の中心から一時間も走れば完全に荒野だ。うらやましい限りだが、相変らず緑がなく、石と岩ばかりの土質はどうもなじめない。そろそろ登り勾配になって遙かに見えた雪山も素晴らしい雄姿をはっきりみせてきた。道路は素晴らしい。山中に入ると右に左に大きくカーブを切りながらぐんぐん高度をかせいでいく。もうその頃になると、鼻筋の整ったイランの人たちの間で、肌が黄色いという独特のキャラクターを持つ私は、彼等の間に入って主役を演じていた。すっかり打ちとけた彼等の中で、窓外の景色を説明してくれる大学生、しきりに日本のことを聞きたがる母子連れ。私は、異国の人々のなかに入って味わうこういうムードが何ともいえず楽しい。途中で行き交う車もあまりない。バスは急峻なカーブをかき切るスピードで走りぬける。幾重にも重なった山々を垣間見ながらのぞく目もくらむような絶壁。途中でどうなったのか、バスを乗り換えた。他の乗客も何故だか判らない。これで予定より一時間ぐらい遅れた。ダマバンドが間近に見えてくると、道路には雪が一杯となった。バスはここで小休止をとり、チェ



バポールへ行く途中で乗り合えた人たち
(中央が筆者)

インをとりつけた。それから再出発。

私は運転助手席に座らせてもらい、くもるフロントガラスをふいてやる。なんとなく寒々としたこの奥地にも飯場のようなバラックが点々と見られる。時折、人夫をのせたトラックが、私たちのバスを追いこしていく。彼等と私は、ジェスチャーで言葉をかわす。追いこしたり追いこされたりしながら外人特有の大きなジェスチャーで、彼等はバスのガラス越しに話しかけてくる。実に愉快だ。

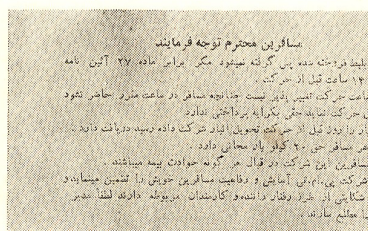
バスは休憩所に停った。お客はここで食事をする。もうこのあたりは一面の雪景色だ。ダマバンドは目の前、直線で一気に登れるようだ。数年前早大が遠征した西アジアの最高峯でもある。なだらかな、気品あふれる女性的な山なみである。素晴らしい。私はしばしとれていた。乗りあわせた人々は、みな申し合わせたように得意気に語る。「あれがダマバンドだよ」「フジヤマとくら

べてどうだい？」イランの人たちはみなきさくだ。とにかくエトランジェが、彼等の誇りであるダマバンドに関心を持ってくれるのがほどうれしいようだ。

私はお世辞にもきれいといえないこのレストランで同じバポールへ向う若い技師の家族と食事をともにした。レンガ造りのこの建物内は、他のバスの乗客でかなり混雑している。窓ごしにみるダマバンドは西陽を浴び、何ともいえないすばらしい光景だ。シシカバブーにシチュー、それにうすっぺらなパン、コーヒ、これで満腹になった。しめて六〇リアル(約二八〇円)

ここでイランのコーヒの飲み方についてひとくさり。まず沸かしたコーヒをコップに注ぐ。ミルクは要らない。氷砂糖のように固まった砂糖のかけらを口の中に放り込む。それをなめたり、かみくだきながらコーヒを飲むという寸法だ。一時間近く休んだ後で、再びバスはバポールへ向った。ダマバンドを大きく巻いて反対側へ回った。裏側から見ると、ダマバンドは相変らずの英姿だ。こちら側はあまり大きなカーブを切らないでトンネルをくぐり抜ける。背後に見るエルブールズ山群のきりたった断崖が、そろそろうす暗くなってきた周囲の地形とも相まってなんとなく室町の水墨画を想わせるから妙だ。少しずつ雪がなくなってくるとチェーンを取りはずす。バスは、やや遅れたが、山脈を通り抜け、平地へ出るとスピードを増した。うす暗い田園地帯を猛進する。時々、羊の群が目の前を横切る。お客の中で声自慢のオッサンがフェスティバルにでも唄うのだろう

景気の良い歌をやりだした。皆で合唱もした。こうして楽しい雰囲気の中、バスはひとつ、ふたつ小さな町に停車して、一八時二〇分頃もうすっかり暗くなったバポールの町へ着いた。私も派手にバスの中で騒いだので少々疲れをおぼえた。技師に紹介してもらった安宿でイラン第二夜の眠りについた。



۱	۲	۳	۴	۵	۶	۷	۸	۹	۱۰	۱۱	۱۲	۱۳	۱۴	۱۵	۱۶	۱۷	۱۸	۱۹	۲۰	۲۱	۲۲	۲۳	۲۴	۲۵	۲۶	۲۷	۲۸	۲۹	۳۰	
۳	۴	۵	۶	۷	۸	۹	۱۰	۱۱	۱۲	۱۳	۱۴	۱۵	۱۶	۱۷	۱۸	۱۹	۲۰	۲۱	۲۲	۲۳	۲۴	۲۵	۲۶	۲۷	۲۸	۲۹	۳۰	۳	۴	۵
۶	۷	۸	۹	۱۰	۱۱	۱۲	۱۳	۱۴	۱۵	۱۶	۱۷	۱۸	۱۹	۲۰	۲۱	۲۲	۲۳	۲۴	۲۵	۲۶	۲۷	۲۸	۲۹	۳۰	۳	۴	۵	۶	۷	۸
۹	۱۰	۱۱	۱۲	۱۳	۱۴	۱۵	۱۶	۱۷	۱۸	۱۹	۲۰	۲۱	۲۲	۲۳	۲۴	۲۵	۲۶	۲۷	۲۸	۲۹	۳۰	۳	۴	۵	۶	۷	۸	۹	۱۰	۱۱
۱۲	۱۳	۱۴	۱۵	۱۶	۱۷	۱۸	۱۹	۲۰	۲۱	۲۲	۲۳	۲۴	۲۵	۲۶	۲۷	۲۸	۲۹	۳۰	۳	۴	۵	۶	۷	۸	۹	۱۰	۱۱	۱۲	۱۳	۱۴
۱۵	۱۶	۱۷	۱۸	۱۹	۲۰	۲۱	۲۲	۲۳	۲۴	۲۵	۲۶	۲۷	۲۸	۲۹	۳۰	۳	۴	۵	۶	۷	۸	۹	۱۰	۱۱	۱۲	۱۳	۱۴	۱۵	۱۶	۱۷
۱۸	۱۹	۲۰	۲۱	۲۲	۲۳	۲۴	۲۵	۲۶	۲۷	۲۸	۲۹	۳۰	۳	۴	۵	۶	۷	۸	۹	۱۰	۱۱	۱۲	۱۳	۱۴	۱۵	۱۶	۱۷	۱۸	۱۹	۲۰
۲۱	۲۲	۲۳	۲۴	۲۵	۲۶	۲۷	۲۸	۲۹	۳۰	۳	۴	۵	۶	۷	۸	۹	۱۰	۱۱	۱۲	۱۳	۱۴	۱۵	۱۶	۱۷	۱۸	۱۹	۲۰	۲۱	۲۲	۲۳
۲۴	۲۵	۲۶	۲۷	۲۸	۲۹	۳۰	۳	۴	۵	۶	۷	۸	۹	۱۰	۱۱	۱۲	۱۳	۱۴	۱۵	۱۶	۱۷	۱۸	۱۹	۲۰	۲۱	۲۲	۲۳	۲۴	۲۵	۲۶
۲۷	۲۸	۲۹	۳۰	۳	۴	۵	۶	۷	۸	۹	۱۰	۱۱	۱۲	۱۳	۱۴	۱۵	۱۶	۱۷	۱۸	۱۹	۲۰	۲۱	۲۲	۲۳	۲۴	۲۵	۲۶	۲۷	۲۸	۲۹
۳۰	۳	۴	۵	۶	۷	۸	۹	۱۰	۱۱	۱۲	۱۳	۱۴	۱۵	۱۶	۱۷	۱۸	۱۹	۲۰	۲۱	۲۲	۲۳	۲۴	۲۵	۲۶	۲۷	۲۸	۲۹	۳۰	۳	۴
۳	۴	۵	۶	۷	۸	۹	۱۰	۱۱	۱۲	۱۳	۱۴	۱۵	۱۶	۱۷	۱۸	۱۹	۲۰	۲۱	۲۲	۲۳	۲۴	۲۵	۲۶	۲۷	۲۸	۲۹	۳۰	۳	۴	۵
۶	۷	۸	۹	۱۰	۱۱	۱۲	۱۳	۱۴	۱۵	۱۶	۱۷	۱۸	۱۹	۲۰	۲۱	۲۲	۲۳	۲۴	۲۵	۲۶	۲۷	۲۸	۲۹	۳۰	۳	۴	۵	۶	۷	۸
۹	۱۰	۱۱	۱۲	۱۳	۱۴	۱۵	۱۶	۱۷	۱۸	۱۹	۲۰	۲۱	۲۲	۲۳	۲۴	۲۵	۲۶	۲۷	۲۸	۲۹	۳۰	۳	۴	۵	۶	۷	۸	۹	۱۰	۱۱
۱۲	۱۳	۱۴	۱۵	۱۶	۱۷	۱۸	۱۹	۲۰	۲۱	۲۲	۲۳	۲۴	۲۵	۲۶	۲۷	۲۸	۲۹	۳۰	۳	۴	۵	۶	۷	۸	۹	۱۰	۱۱	۱۲	۱۳	۱۴
۱۵	۱۶	۱۷	۱۸	۱۹	۲۰	۲۱	۲۲	۲۳	۲۴	۲۵	۲۶	۲۷	۲۸	۲۹	۳۰	۳	۴	۵	۶	۷	۸	۹	۱۰	۱۱	۱۲	۱۳	۱۴	۱۵	۱۶	۱۷
۱۸	۱۹	۲۰	۲۱	۲۲	۲۳	۲۴	۲۵	۲۶	۲۷	۲۸	۲۹	۳۰	۳	۴	۵	۶	۷	۸	۹	۱۰	۱۱	۱۲	۱۳	۱۴	۱۵	۱۶	۱۷	۱۸	۱۹	۲۰
۲۱	۲۲	۲۳	۲۴	۲۵	۲۶	۲۷	۲۸	۲۹	۳۰	۳	۴	۵	۶	۷	۸	۹	۱۰	۱۱	۱۲	۱۳	۱۴	۱۵	۱۶	۱۷	۱۸	۱۹	۲۰	۲۱	۲۲	۲۳
۲۴	۲۵	۲۶	۲۷	۲۸	۲۹	۳۰	۳	۴	۵	۶	۷	۸	۹	۱۰	۱۱	۱۲	۱۳	۱۴	۱۵	۱۶	۱۷	۱۸	۱۹	۲۰	۲۱	۲۲	۲۳	۲۴	۲۵	۲۶
۲۷	۲۸	۲۹	۳۰	۳	۴	۵	۶	۷	۸	۹	۱۰	۱۱	۱۲	۱۳	۱۴	۱۵	۱۶	۱۷	۱۸	۱۹	۲۰	۲۱	۲۲	۲۳	۲۴	۲۵	۲۶	۲۷	۲۸	۲۹
۳۰	۳	۴	۵	۶	۷	۸	۹	۱۰	۱۱	۱۲	۱۳	۱۴	۱۵	۱۶	۱۷	۱۸	۱۹	۲۰	۲۱	۲۲	۲۳	۲۴	۲۵	۲۶	۲۷	۲۸	۲۹	۳۰	۳	۴
۳	۴	۵	۶	۷	۸	۹	۱۰	۱۱	۱۲	۱۳	۱۴	۱۵	۱۶	۱۷	۱۸	۱۹	۲۰	۲۱	۲۲	۲۳	۲۴	۲۵	۲۶	۲۷	۲۸	۲۹	۳۰	۳	۴	۵

ころはモンバサでタンザニアのビサを取得できなかったで、キリマンジャロ山麓のモシ市へ行くことができず、止むなくムチット・アベディでキリマンジャロへの淡い希望を託したのだ。

朝八時にモンバサのバス停へ行った。もう満員だ。イランのバスよりずっと汚ないし、混んでいた。私は最後部座席へ割り込ませてもらったが、両側に黒い女性が座り、珍らしい東洋からの「お客さん」に何くれとなく世話をやいてくれた。これぞ両手に黒い花。ムチット・アベディまで一三シリング(六七五円)。バスの車内は混みあって黒人(彼等のほとんどはマサイ族かクク族である)インド人、パキスタン人というとりどりだ。このバスもものすごいスピードで平原を突走る。道路だけはすばらしい、いわゆるサヴァンナ地帯を脇目もふらずに走りつづける。あまりカーブもないが、たまにあるゆるいカーブもスピードを落さずにただ運転手は無表情にとぼす。遠心力という物理的な力で身体をぶつけるのは料金を払ったお客だ。黒いお嬢さんとは何せ話が通じない。片言のスワヒリ語だ。ただカッコいいミニスカートには目を奪われる。

サヴァンナは砂礫といおうか、砂と石のかたまりのような乾いた平原で、そのために樹木は大きく成長せずにところどころ点々とみえるにすぎない。サファリ(猛獣狩り)にでかける車が時々行き交うが、車もあまりみかけない。空はつきぬけるように青い。ムチット・アベディに着くまでに二ヶ所で停った。私は乗車した時から己に注目されていたが、車内で子どもたちに「幸せなら手を

たたこう」を教えている内にすっかり名物男になっていた。私の行くところすべて好奇の目がついてくる。ここでもそうだった。物売りが、頭に手に豊富な果物・野菜をもってどっとバスを取り囲む。だが、正直なところ果物は確かに安い。バナ



バスがパンクした時遊びにやって来たマサイ族の子どもたち

ナなんかべらぼうに安い。私はオレンジを買ったのをうるおした。二〇分ばかり停車した後また出発だ。時々羊の群が道を横切る。バスは何をそんなに急ぐのか、運ちゃんはただ黙々と前をみつめ、汗をかいてハンドルを握っている。だからただひたすらにバスをとばすという彼の職業を少しでも妨害しようものなら、頭へ来ることになる。

たまたまバスの警笛におどおどして羊が数頭、道路上に立往生してしまった時など、怒り心頭に達したのか、帽子をたたきつけながら羊追いの子どもの前に来るや、まだ小学生の頃、しばしば軍隊帰りの教師にくった、あのなつかしくも苦々しく思い出す往復ビンタという奴を目にもとまらぬ早技でくらわしたのだ。見ている方が呆気にとられている内に、彼は席へ戻るやまたまたボーカルフュイス、再びナイロビへ向けて車をとばした。道すがら、ワラブキの家が草原の中に点在する。アフリカでも一番美しいといわれているナイロビは我々が見ても確かにそう感じるが、こういった家々には電気はもちろん水道もない。まだまだ立ち遅れた国というべきだろう。

赤道の太陽が真上にさしかかった頃、目指すムチット・アベディに着いた。私は屋根から荷物をおろしてさてこの町はと見回したところが、まるで町なんてものじゃない。それにキリマンジャロにも少し遠すぎるようだ。サファリの根拠地でインがたった一軒あるだけなので、モンバサでこのインの名まえをきいていたのでザックを背負い、炎暑の中をとことこ歩いていった。ところがその前まできて実はいやいな感じがしてきた。垣根越しに見ると、どうも平屋建とはいえないがなかなかショウシャな建物できれいだ。庭のプールでは白人どもが泳いでいる。ある階層だけのクラブ的匂いがプーンとしてきた。ボーイは全て黒人で、マナージャーだけ白い若僧だ。私の珍奇なスタイルはまず場違いだ。案の定断わられた。さあ大変だ。宿がない。こんな平原の真只中に放

っぽられたらサファリのベースだけに何に襲われるか判ったものじゃない。必死になって今来た道を逆戻り、発車寸前のバスに頼みこんで辛くも猛獣のエジキにならずに済んだ。ここからナイロビまで一三・五シリング(六九五円)。

バスはサヴァンナを黙々と突走る。運ちゃんは相変らず無表情でハンドルを握っている。私は今度は運ちゃんの脇へ席を移してアフリカの大地をしっかりと脳裏へやきつけた。およそ二時間ばかりしてドライブインに入る時、曲がりっぱな左の後輪を大きな石にぶつけた。タイヤが破れてパンクだ。と同時にホイールもやられた様だ。それまで気になっていたのだが、ケニヤにはサイドミラーのない車が多い。日本と同じ左側通行だから左折する時に余程気をつけないとあぶない。バスにサイドミラーがないなど考えられないが、とうとうやってしまった。ここで約一時間半ばかり次のバスが来るまで待つことになった。

近所の黒いジャリドもが破れたシャツをきてはだして寄ってきた。いたいた！これぞガキの頃ターザンのマンガでみた土人(単なる黒人とは違う)がドライブインに居た。まず、頭はユル・ブリンナー、ちぢれっ毛を見事にそっている。両耳タブに大きな穴をあけ、リングをぶらさげ、鼻にも牛と同じにハナワをぶらさげ、ごていねいに首に、両手、両足首にも輪をはめ、衣類は？といえは、うすよこれた毛布地の袈裟のようなワンピース。余程丸いものが好きなのか鉄輪のついた鉄棒を片手に持って徳利を抱えていた。足にはワラ草履をはいていたが、完全に扁平足だ。こういう

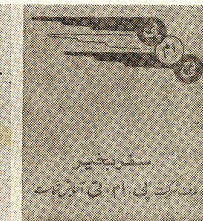
のが五、六人、マサイ族に違いない。膚はカサカサに乾いてツヤがない。アフリカ土人の典型だろう。

ここでエピソードをひとつ。がいて黒人は原色を好むが、シワの寄ったもう中年に近いと思われる女性でも派手な赤や黄のワンピースを着ている。申し遅れたが、乗客の半分は女性である。長いバス停の間に生理的欲求が起るのは止むを得ない。彼女たちは共斗を組み、車掌に停車を命じるのだ。ニヒルな運ちゃんはいやーな顔をしてしぶしぶ止める。ところが、これが面白い。彼女等は脱兎の如く飛び出すや、一寸した茂みの中へかけこみ、実に悪びれずぱつとスカートをめくり、そのまま不動のポーズをとってごく自然に用を足す。高いバスからはまる見えだ。彼女等はそんなことにはお構いなく「シャ、シャ」としたものだ。彼女等はやや前かがみに一列横隊でバスに向う。落下傘スタイルのスカート、そしてバラエティに富んだ色彩なのでビーチパラソルの花が一度に咲いた様だ。まったくおあいきようだ。

次のバスがやってきた。荷物を積み換え、再びナイロビへ。私は隣りの四ツの男の子をからかっていた。とその時、突然目の前をキリンの夫婦がのそりのそりと出てきた。バスはパッパとなりす。キリン夫妻は、悠然と大またで横切っていた。しばらく進むと、今度はダチョウのつがい之又々進路を妨害した。遙かな地平線はどこまでもつづく。窓からの冷風も心地良い。

だが漸やくうす暗くなりはじめ、ナイロビへ近

づくにつれて好奇の目をみはることが多くなった。牛の大群、この牛も日本でみかける農耕牛と違って背に大きなコブがついている。更に羊の行列……。



そしてナイロビも間近になって私のエモーションな心に決定的にとどめを刺した光景にくわした。大平原からナイロビ市内に入る寸前にケニヤの陽が落ちた。

地平線に沈む大きくマツカな太陽は、私にこれまでに見た夕日の光景の中で最も印象的な場面だった。

しばし、ぼう然としてこのロマンチックで素晴らしいシーンに埋もれた。感動に打たれた。そのまま夕七時にナイロビへ着いた。

この旅のエピローグとして夕暮れの日平線はあまりに詩情あふれるものだった。

